



《シリーズ・ケアをひらく》

刑務所で当事者研究をやってみた

対話実践とチーム処遇が扉をひらく

向谷地 生良, 村上 靖彦 編著

どんな場所でも中心に据えるべき
“ケア論の核心”を示す手がかり

【評者】 福田 正人 群馬大名誉教授・精神医学

「刑務所」という大きな赤字が表紙にある。しかし、「本書は、刑務所というニッチな場所での特殊なケアを紹介したものではない。どんな場所でも中心に据えるべき“ケア論の核心”を示す貴重な手がかりとなる内容」である。「つながりの喪失」という存在の危機があり、「つながりを希求する形として“犯罪(社会化)”があり“こころの病(非社会化)”がある」が、そのいずれでもない「第三の手立てとしての可能性」、つまり“仲間”との“研究つながり”を開くことが、当事者研究であるという。

札幌刑務所での当事者研究は、受刑者1人、刑務官2~3人、外部メンバー5~6人(北海道医療大学、大阪大学、浦河べてるの家という外部からの協力メンバー)で行われた。「刑務所スタッフのあいだで“最もかわりが難しい”と言われ、統合失調症の診断を受けた受刑者Aさんとの当事者研究の記録」である。

向谷地生良氏による語り「なぜ刑務所で当事者研究？」(第1章)と、解説(第2章)から始まる。そこで強調されるのは、「その人が主体的に試行錯誤を始める第一歩、その踏み出しを徹底して大事にする」という

「当事者研究の基本中の基本」であり、「あなたに対して私たちは何かをするっていうんじゃなくて、あなたから私たちは教えてもらいたいことがいっぱいあるのだ」という姿勢である。

著者の一人である鈴木和氏が、当事者研究で明らかになったAさんの詳しい人生歴を3ページにわたる図としてまとめてくれている(第3章)。また、現象学の視点から村上靖彦氏が丹念にたどったAさんの語り(第4章)が紹介されているが、当事者研究はAさんのトラウマにフォーカスするのではなく、あくまでAさん本人が話したいことを話題の中心としていく。

「人づきあいが苦手」なために「周りの人に迷惑をかけない」ように器物損壊事件を起こし、「自由が逆に困って」「何していいんだか、わかんなくなつて」旅に癒しを求めるという自分助けを試み、「導いてくれる存在」(刑務官)による「特別扱い」という「信頼」を大切にしている、といったことが語られる。当事者研究が進むにつれて、「仕事から逃げて空き巣、居空き」をするのではなく「相談する」という方法に気づき、語りの中に行爲の主語としての自分が少しずつ現れ、話に唯一登場する重要な他者である母へ

の思いが言葉になっていく。

しかし、そうしたAさんの人生歴と語りは、この当事者研究の半分にすぎない。第5章で刑務官Xさんは、刑務官として、「名前と顔がない関係」から成る規律の世界の「訊く」と、当事者研究の対話の世界の「聴く」のバランスを求めて、「スタンス、スイッチ、タイミング」を模索していると語る。つまりこの試みは、刑務官にとっての当事者研究でもあったのだ。また、当事者研究の噂は刑務所内でも広まり、当事者研究に関わらなかった刑務官も「少し時間をもってAさんと向き合う」ようになるという変化があったという。

第6章で奥田かおり氏は、「出所後も続く管理文化」ではない「伴走的なコミュニティ・ソーシャルワーク」をめざして、当事者にも支援にも「応援ミーティング」で関わり続けようとする、そこでの葛藤を描いている。

通読すると、当事者研究の体験が、Aさん、Xさん、外部メンバーとでそれぞれ異なっていることが伝わってくる。それは、この研究に参加したすべての人が「当事者」であったからこそである。

向谷地氏は言う。「大事なのは、何度でもやり直しができ、



“安心して行き詰まることができる”地域の居場所があることと、具体的な人のつながりが保証されていることなのだ」。そ

のことを読者として体験し、「専門職が専門性から降りる」ことを考えさせてくれる大切な記録である。

A5判・頁216 2026年3月
定価：2,200円（本体2,000円＋税10%）
[ISBN978-4-260-06565-8] 医学書院刊